様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月　５ 日現在

機関番号：３２７０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００６３８

研究課題名（和文）平安期鎌倉期の日本語における格非表示名詞句の運用システム

研究課題名（英文）An Operational System for Case-Non-display Noun Phrase in Heian-Kamakura Period Japanese

研究代表者
山田　昌裕（YAMADA, MASAHIRO）

神奈川大学・国際日本学部・教授

研究者番号：７０４０９８０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、平安期鎌倉期において格助詞を伴わない、〈名詞句＋係助詞〉や〈名詞句＋副助詞〉が、統語上どのような成分として振る舞い、どのようなシステムで運用されていたのか、その全体像を明らかにしようとする研究である。
「コソ」「ゾ」「ナム」「ヤ」「カ」「ノミ」「ダニ」「サヘ」が下接する名詞句はガ格として機能するが、「バカリ」はガ格・ヲ格として機能し、「ナド」はヲ格として機能する割合が高いという実態が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、平安期鎌倉期の日本語において、格助詞を伴わない〈名詞句＋係助詞〉や〈名詞句＋副助詞〉が情報伝達上どのような統語的機能を担い、それぞれの時代において、どのようなシステムで運用されていたのかを明らかにした上で、これまで明らかにしてきた無助詞名詞句の統語的振る舞いを合わせて、格助詞を伴わない名詞句全体の統語的振る舞いと運用システムを解明することが目的である。
このような研究はこれまで部分的にしか存在せず、本研究の成果は、これまでの統語的研究や言語類型研究の欠落を補い、日本語文法史研究の促進と発展に寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：　This study aims to clarify the overall picture of how 〈noun phrases + 副助詞〉〈noun phrases + 係助詞〉 without case particles behaved syntactically and what kind of system they operated under in the Heian-Kamakura period.
It was found that noun phrases with "koso," "zo," "nam," "ya," "ka," "nomi," "dani," and "sahe" functioned as “GA”case, while "bakari" functioned as “GA” “WO” case and "nado" functioned as “WO” case in a high percentage of cases.

研究分野：日本語史

キーワード：格非表示名詞句　無助詞名詞句　平安期鎌倉期　有生名詞句　無生名詞句　係助詞　副助詞

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、平安期鎌倉期において格助詞を伴わない、〈名詞句＋係助詞〉や〈名詞句＋副助詞〉（以下、これらを格非表示名詞句と呼ぶ）が、統語上どのような成分として機能し、どのようなシステムで運用されていたのか、これまで明らかにしてきた無助詞名詞句の統語的振る舞いを合わせて、その全体像を明らかにしようとする研究である。このような研究はこれまで部分的にしか存在せず、体系的研究は行われていなかった。個人的な調査ではその労力と時間に限界があったためである。しかし近年、国立国語研究所によって『日本語歴史コーパス』が開発され、オンライン検索ツール「中納言」を用いることにより、個人レベルでの研究が可能となった。本研究は、以上のような学術的背景をふまえ、実施するものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、平安期鎌倉期において格非表示名詞句が、統語上どのような成分として振る舞い、どのようなシステムで運用されていたのか、これまで明らかにしてきた無助詞名詞句の統語的振る舞いを合わせて、その全体像を明らかにすることである。

３．研究の方法

(1) データの作成

国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』を用いて、平安期鎌倉期の分析用データをそれぞれ作成する。手順は以下の通りである。ａ．「名詞」「代名詞」「名詞接尾辞」に下接する副助詞、係助詞の検索を行う。ｂ．検索結果を Excel に落とし込む。ｃ．それぞれの名詞句に「有生性無生性」「格成分」「構文的環境」「述語」などの情報を付加する。ｄ．ａ～ｃの過程を経て作成した分析用データは公開にむけて、適宜、研究協力者によって整理・チェックを行う。

(2) 分析の方法

①　数量的分析

作成したデータをもとに数量的分析を行なう。数量的に分析することで、共時態としての全体像を捉える。格非表示名詞句がどのような統語的役割を担っていたのかを明らかにする。

②　クロス集計による多角的分析

・名詞句の統語的役割と有生性・無生性との相関関係を明らかにする。
・名詞句の統語的役割と構文的環境との相関関係を明らかにする。
・名詞句の統語的役割と述語との相関関係を明らかにする。

③　全体像を踏まえながら格非表示名詞句の運用法を解明する。

４．研究成果

(1) 全体像

以下の表は格非表示名詞句がどのような格成分として機能しているのかを示したものである。表中のガ格、ヲ格、ガヲ格、その他の格（④⑤）に該当する具体例を以下に示す。

①　「我こそ（ガ）死なめ」とて、泣きののしること、いと堪へがたげなり　（竹取物語 66）
②　来けるあひだに、車よりかかることぞ（ヲ）いひたる　（平中物語 494）
③　外国にありけむ香の煙ぞ（ガ・ヲ）、いと得まほしく思さるる　（源氏物語・総角 312）
④　知れる人、逍遙せむとて、呼びければ、そちぞ（ニ）この男はいにける（平中物語 496）
⑤　「なほかう思し知らぬ御ありさまこそ（デ）、かへりては浅う御心のほど知らるれ」
（源氏物語・夕霧 408）

【平安期】

	ガ格		ヲ格		ガヲ格		その他の格		合計	
コソ	492	89.0%	25	4.5%	21	3.8%	15	2.7%	553	100.0%
ゾ	373	91.2%	16	3.9%	15	3.7%	5	1.2%	409	100.0%
ナム	319	90.4%	22	6.2%	9	2.5%	3	0.9%	353	100.0%
ヤ	260	85.2%	38	12.5%	2	0.7%	5	1.6%	305	100.0%
カ	156	83.9%	21	11.3%	2	1.1%	7	3.7%	186	100.0%
サヘ	199	87.0%	18	7.9%	9	3.9%	3	1.2%	229	100.0%
ダニ	178	82.4%	27	12.5%	6	2.8%	5	2.3%	216	100.0%
ノミ	227	83.8%	18	6.6%	23	8.5%	3	1.1%	271	100.0%
バカリ	96	55.2%	70	40.2%	6	3.4%	2	1.2%	174	100.0%
ナド	1120	43.4%	1386	53.8%	33	1.3%	39	1.5%	2578	100.0%

【鎌倉期】

	ガ格		ヲ格		ガヲ格		その他の格		合計	
コソ	402	93.9%	12	2.8%	11	2.6%	3	0.7%	428	100.0%
ゾ	165	91.6%	10	5.6%	5	2.8%	0	0.0%	180	100.0%
ナム	14	93.3%	1	6.7%	0	0.0%	0	0.0%	15	100.0%
ヤ	157	86.7%	24	13.3%	0	0.0%	0	0.0%	181	100.0%
カ	149	92.0%	12	7.4%	0	0.0%	1	0.6%	162	100.0%
サヘ	60	85.7%	5	7.2%	4	5.7%	1	1.4%	70	100.0%
ダニ	66	83.5%	10	12.7%	3	3.8%	0	0.0%	79	100.0%
ノミ	120	86.3%	13	9.4%	6	4.3%	0	0.0%	139	100.0%
バカリ	92	60.1%	50	32.7%	3	2.0%	8	5.2%	153	100.0%
ナド	68	38.4%	259	59.3%	4	0.9%	6	1.4%	437	100.0%

表中の数値より、以下の２点が特徴としてあげられる。

・格非表示名詞句は、大部分がガ格またはヲ格で用いられており、その他の格としての運用は0%～5%となっている。裏を返して言えば、ガ格ヲ格以外の格として格非表示名詞句を運用する際には格助詞の標示が必要となる。

・格非表示名詞句はさらにガ格としての運用に傾くが、「バカリ」はヲ格としての運用も多く見られ、「ナド」に関してはガ格よりもヲ格での運用の割合が高くなっている。

（2）有生性無生性から見る統語的振る舞い

山田（2021）では、無助詞名詞句の統語的振る舞いについて、名詞の有生性無生性によって差異が生じることを指摘しているが、以下の表は、有生性無生性から見た格非表示名詞句の統語的振る舞いを示したものである。ガ格とヲ格で運用されることが明らかとなったので、ガヲ格、その他の格の数値は除き（分析には影響がない）、格非表示名詞句の運用法を明確にしたい。

		平安期				鎌倉期			
		ガ格		ヲ格		ガ格		ヲ格	
有生名詞句	コソ	164	98.8%	2	1.2%	151	99.3%	1	0.7%
	ゾ	149	99.3%	1	0.7%	46	95.8%	2	4.2%
	ナム	128	98.5%	2	1.5%	5	100%	0	0.0%
	ヤ	82	96.5%	3	3.5%	55	96.5%	2	3.5%
	カ	73	98.6%	1	1.4%	57	98.3%	1	1.7%
	サヘ	63	100.0%	0	0.0%	16	100.0%	0	0.0%
	ダニ	98	100.0%	0	0.0%	25	100.0%	0	0.0%
	ノミ	36	97.3%	1	2.7%	11	100.0%	0	0.0%
	バカリ	39	88.6%	5	11.4%	54	85.7%	9	14.3%
	ナド	457	88.6%	59	11.4%	74	79.6%	19	20.4%
無生名詞句	コソ	327	93.2%	24	6.8%	251	95.8%	11	4.2%
	ゾ	224	93.7%	15	6.3%	119	93.7%	8	6.3%
	ナム	190	90.5%	20	9.5%	9	90.0%	1	10.0%
	ヤ	178	83.6%	35	16.4%	102	82.3%	22	17.7%
	カ	83	80.6%	20	19.4%	92	89.3%	11	10.7%
	サヘ	136	88.3%	18	11.7%	44	89.8%	5	10.2%

	ダニ	80	74.8%	27	25.2%	41	80.4%	10	19.6%
	ノミ	191	91.8%	17	8.2%	109	89.3%	13	10.7%
	バカリ	57	46.7%	65	53.3%	38	48.1%	41	51.9%
	ナド	663	33.3%	1327	66.7%	94	28.1%	240	71.9%

山田（2021）によれば、平安期における有生無助詞名詞句では 89.8%がガ格、無生無助詞名詞句 58.6%がガ格として機能し、鎌倉期における有生無助詞名詞句では 95.3%がガ格、無生無助詞名詞句では 68.3%がガ格として機能している。表中の数値が無助詞名詞句よりも高い部分は黄色、無助詞名詞句よりも低い部分は緑色で色分けしてある。「コソ」「ゾ」「ナム」「ヤ」「カ」「サヘ」「ダニ」「ノミ」は有生無生に関わらず無助詞名詞句よりもガ格としての運用が多く、「バカリ」「ナド」は有生名詞句では無助詞名詞句と同程度でガ格となり（「ナド」は少し割合が低い）、無生名詞句においては無助詞名詞句に比べ、ガ格よりもヲ格での運用が多いということが見て取れる。無助詞名詞句の統語的運用に対する数値の高低は、係助詞や副助詞の統語的性質の表れと見ることができる。

（3）格非表示名詞句の運用法

非格非表示名詞句は「コソ」「ゾ」「ナム」「ヤ」「カ」「サヘ」「ダニ」「ノミ」と「バカリ」「ナド」とでは統語的振る舞いに差異があることが明らかとなった。前者をＡ類、後者をＢ類として、それぞれの運用法について考察する。

①Ａ類の運用

〈ガ格としての運用法〉

有生名詞句は原則としてガ格で運用される。無生名詞句もガ格での運用が多く見られるが、意志性を持たないため、非意志自動詞や形容詞文におけるガ格としての運用となる。

・いよいよ隔てたまふことのみ（ガ）まされば、心細く悲しきに　（源氏物語・真木柱 369）

・泣いたまふさまぞ（ガ）心苦しき　（源氏物語・紅葉賀 327）

〈ヲ格としての運用法〉

有生名詞句をヲ格対象として使用する際には、原則として「ヲ」を標示して運用しなければならない。Ａ類はガ格として機能するため、当該の有生名詞句がヲ格対象であることを明示しないと情報伝達上の支障が生じるためである。ただし、共起成分として他にガ格行為者が存在する場合や、ある種の他動詞文においては(注)、「ヲ」を標示しなくてもヲ格対象として運用できる。

・「その姉君は朝臣の弟妹や（ヲ）もたる」　（源氏物語・帚木 105）

・尾張へは、殿の上ぞ（ヲ）つかはしける　（紫式部日記 177）

無生名詞句は他動詞文においては原則としてヲ格対象として運用するが、共起成分として他にヲ格対象の存在を示すという統語上の操作があれば、ガ格行為者として運用することもできる。ただし、ガ格行為者としての運用は僅少である。

・若菜ぞ（ガ）今日をば知らせたる　（土佐日記 22）

・はしに出でゐてながめば、いとど、月や（ガ）いにしへ（ヲ）ほめてけむと　（紫式部日記 203）

②　Ｂ類の運用

〈バカリの運用〉

原則として有生名詞句はガ格として運用される。ただし、他のガ格行為者が共起していればヲ格としての運用もできる。

・日も高うなれば、この女の親、少将にあるじすべき方のなかりければ、小舎人童ばかり（ヲ）とどめたりけるに、かたい塩、肴にして、酒をのませて　（大和物語 419）

無生名詞句は、他動詞文においてはヲ格として、それ以外はガ格として運用される。ただし、他のヲ格対象が共起していれば、他動詞文においてもガ格として運用できる。

・解けわたる池の薄氷、岸の柳のけしきばかりは（ガ）時を忘れぬなど、さまざまながめられたまひて　（源氏物語・賢木 136）

〈ナドの運用〉

原則として有生名詞句はガ格として運用される。ただし、他にガ格行為者が共起する場合やある種の他動詞文においては、ヲ格対象として運用できる。

・衛門督（ガ）、昨日、いと暮らしがたかりしを思ひて、今日は、御弟ども、左大弁、藤宰相など（ヲ）奥の方に乗せて見たまひけり　（源氏物語・若菜下 238）

無生名詞句は、他動詞文においてはヲ格として、その他はガ格として運用される。ただし、他のヲ格対象が共起していれば、他動詞文においてもガ格として運用できる。また「ガ」「ノ」を付加してガ格行為者としての運用も可能である。「ガ」「ノ」を付加してガ格行為者として運用できるのは「ナド」の特徴である。

・田舎だち、事そぎて、馬の形かきたる障子、網代屏風、三稜草の簾など（ガ）、ことさらに昔の事をうつしたり　（枕草子 185）

・玉ほし川。細谷川。いつぬき川、沢田川などは（ヲ）催馬楽などの思はするなるべし　（枕草子 115）

（4）ガ格への偏りの理由

Ａ類は、無助詞名詞句よりもガ格への偏りが大きいという特徴があった。尾上（2004）は「名詞項と述語との意味関係を大きく変えないで格助詞で言うとすればガが用いられる項」をガ格項と定義し、「多様なガ格項の共通性とは、一言で言えば、事態認識の中核項目ということであろう」と述べる。ガ格の特質のひとつが「事態認識の中核項目」であるならば、係助詞が持つとされる「焦点」や副助詞が持つとされる「とりたて」などとの親和性は高くなるはずである。Ａ類の非格非表示名詞句がガ格に偏るのは、こうした背景があると考える。またＢ類は、有生名詞句において無助詞名詞句と同様の統語的振る舞いを示し、無生名詞句においては無助詞名詞句よりヲ格に偏るという特徴が見られたわけであるが、この現象は、「バカリ」「ナド」が持つ「とりたて」性が低いということを示すか、あるいは「サヘ」「ダニ」「ノミ」とは異なった「とりたて」性を持っているということを示すものと考えられる。

（5）今後の課題

非格非表示名詞句が全体としてはガ格に偏ることが明らかとなった。ガ格の多くは無助詞名詞句となるが、無助詞名詞句に関してはすでに調査が終わっている。今後の課題としては主語名詞句に下接する「ガ」「ノ」の実態調査とそれを踏まえた運用法の解明が必要となる。

注　「出だす」「産む」「おこす」（「よこす」の意）「起こす」「通わす」「具す」「つかはす」「とどむ」「まうく」「待つ」「召す」「呼ぶ」「やる」「率て来」などの他動詞における有生名詞句は、「ヲ」の標示を受けなくても対象として機能しているものと思われる。このようにある種の他動詞文においては、有生名詞句がヲ格対象として使われる傾向があるようである。詳細については今後の課題としたい。

【参考文献】

尾上圭介（2004）「主語と述語をめぐる文法」『朝倉日本語講座六』朝倉書店、pp. 1-57

山田昌裕（2021）「無助詞名詞句の格と運用法―平安期鎌倉期の実態より―」『日本語文法』21-1、pp. 4-20

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山田昌裕	４．巻 53
２．論文標題 （再考）古典語に見られる〈名詞句＋副助詞〉の格 ―平安期の実態―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 青山語文	６．最初と最後の頁 190－204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田昌裕	４．巻 209
２．論文標題 （再考）古典語に見られる〈名詞句＋係助詞〉の格 ―平安期の実態―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 人文研究	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田昌裕	４．巻 210
２．論文標題 古典語に見られる〈名詞句＋副助詞〉の格―鎌倉期の実態―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 人文研究	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山田昌裕
２．発表標題 格非標示名詞句の格
３．学会等名 人文学研究所　共同研究グループ日中韓対照言語研究
４．発表年 2021年

１．発表者名 山田昌裕
２．発表標題 「マデガ」「バカリガ」における「ガ」の表現性――抄物を中心として――
３．学会等名 第161回表現学会東京例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 山田昌裕
２．発表標題 助詞「が」の変容―連体用法から連用用法へ―
３．学会等名 第20回対照言語行動学研究会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関